

学校・社会教育講座 公開シンポジウム 「資格教育とリベラルアーツ～その課題と将来～」

2007年10月28日

立教大学 池袋キャンパス7号館 7102教室

開会挨拶

学校・社会教育講座主任 山浦 清

本日は、ホーム・カミングデーということでもあります。このシンポジウムにご参列、ご参集いただきまして、誠にありがとうございます。

私は学芸員課程の主任であり現在、学校・社会教育講座4課程を代表する主任を務めております山浦です。

講座ができてちょうど40年ということとなります。今日皆さまに配られたものを見ていただくとお分かりになると思いますが、学校・社会教育講座でこの40年間に教職課程が10,268名、学芸員課程が1,336名を輩出するというように、多くの修了生、有資格者を輩出しております。

しかし、40年間という時間は大学も、大きく変容せざるを得ない状況でもあります。また教職課程、学芸員課程も含めて法律の上での改正があり、改悪とは言いませんが、いろいろな変化が起きてきているのは現実のところであり、このような時間の流れの中で、講座4課程が統合設置されて40年、ということです。40年前に我々の先任、あるいは先々任かもしれません、学校・社会教育講座という組織を



立教大学の中におつくりになった。現在我々、中にいる人間といたしましては非常にすばらし

い制度でもあるし、非常にいいものであると思います。しかし今お話しましたように、様々な大学をめぐる状況の変化あるいは法律の改定ということがあって、大きな変革といえますか変容、変化をせざるを得ないような状況にも来ているかと思えます。

この40年間の過去を振り返り、あるいはまた、現在の状況を確認しながら、今後、よりよい形での学校・社会教育講座というものを目指していきたい。そのためのひとつのきっかけ、あるいはアイデアといえますか、方向性を見つけること、また見つけるためのひとつのステップとして、このようなシンポジウムを開催する運びになりました。そして、寺崎先生をはじめといたしまして、5名のOB・OGの方々にシンポジウムで発言していただくことをお願いしたわけです。

本日はお忙しい中、多数の皆様にご参加していただきまして、誠にありがたく思っております。

す。また寺崎先生、そして卒業生であるシンポジストの皆さんにはお忙しい中をそれぞれお引き受けいただき、心から感謝しております。

限りある時間ですが今日は実りの多い話がで

ければ我々にとっても非常に有効であると思います。

それでは、どうぞよろしくお願い致します。

式辞

学校・社会教育講座委員長 渡辺信二

今日は、学校・社会教育講座公開シンポジウムにご来場くださりありがとうございます。

私は、文学部長も務めておりますが、これは歴史的な経緯から、学校・社会教育講座が文学部所属となっているためです。

今、大学全体が冬の時代ですが、とりわけ、文学部も冬の時代と云われております。その中で、文学部と学校・社会教育講座の先生方が中心となって、リベラルアーツとは何か、人文学とは何か、いかなる社会貢献がわれわれにとって可能であるのか、を再点検しているところです。このような状況のなかで学校・社会教育講座40周年という節目を迎えまして、これをきっかけにさらによく考えようと思っております。

学校・社会教育講座にとって40周年である本年2007年は、立教学院で考えますと133周年、文学部でいえば、ちょうど100周年となります。もともと、立教大学はリベラルアーツの大学でした。聖書を英語で読んで人格を陶冶していく、それが教育目標でした。基本的に教養教育です。その方針に基づいてきめ細かい教育指導を行って、教員と学生の壁をなるべく低くしながら共に学んでいく。顔の見える教育をやりたいという中で、教職課程、教員になりたい学生のための課程を持つということの大きな意味をもう一



回確認したいと思うのです。

一般的にまた世界的に見ても、人文学は衰退

しているといわれています。でも、その理由は何か。たぶん、基本的に母語能力が衰退していること、それから、深く、長く、広く考える能力が減退していることでしょう。さらには、目先の利益を求めるといゆる実学志向がある。そうして、こうした原因のもと根本には、もう自分の命の永遠性とか人類の永遠性とか、あるいは、地球の永遠をもう信じられなくなっている時代になってきたということがあるのではないのでしょうか。

シェークスピアに、「あなたは永遠には生きられないけれども、自分の子孫を残すことによって自分の美しさとか自分の資質が永遠に残る」という趣旨のソネットがあります。子孫を残すことが、じぶんの永遠性を信ずる根拠の一つでした。それを大きく言えば、これまでは、人類がこのままずっと進歩発展していくのだろうと信じられてきた。しかし、ある時期そんなことはないのだと思うようになった。特に日本人は1945年のことを考えればわかると思いま

すが、人類とは本当に永遠に生き延びることができる種なのだろうか、あるいは、生き伸びても良い種であるのだろうか、という問いがある時から起きたわけです。それから、今、言われている環境問題というのは、地球そのものが実はやっぱり滅びるのではないかという示唆を明確に示します。単に技術とか科学とかを発展させるのが環境にとって良いのかどうか。

こうした大きな疑念が、刹那的、虚無的、退廃的な発想を促しているように思えてなりません。しかし、一旦生を受けてなぜそれを大切にできないのでしょうか。僕ら、個人個人の生き方をもっと大切にする中で、本当の学び、われわれは一体何者であって、今ここにいて、何処に行こうとするのか。あるいは、人類がいったいなぜ誕生し、今ここにいて、いったい何処に行こうとしているか。これをきちんと考える。これを問題提起し、かつ、その解答を模索する。これができるのはリベラルアーツ、すなわち、人文学だけだと思います。

人文学というのは、ここでは当然ですが、広く定義してください。人文学とは、人間学です。個人個人の生活を発想の基盤としながら、等身大の人間として相手を尊重するなかで、人間の過去から未来までを哲学していく。そういう学問です。そして、学校・社会教育講座というのはそうした人間学を実際に、教育の現場ではどうなのか、子どもたちがそれぞれの人生を前向きに明るく楽しく捉えて行くにあたって、われわれは、われわれの学びは、いかなる貢献ができるのだろうかを模索する場であります。

一般的な答えはありません。個々にそれぞれの現場で考えるほかありません。それは、苦し

い。苦しいけれど、でも、教師冥利に尽きると言えるのではないのでしょうか。

実際、教育実習から帰ってきた学生たちと話をすると、かなり成長している。大人になって帰ってくる。では、なぜ大人になるかという、人文学で学んだことの実践というか、本当の意味でのコミュニケーション能力とか、直に子供たちと接することによって自分が成長させてもらうような、そういう機会なのでしょう、教育実習というのは。

学校・社会教育講座が果たしている役割は、単に資格取得を学生に提供することではありません。また、よい教育者をつくるためだけでもありません。もっと大きく、良き教育を受ける人たちも育てていくという広い目的があります。そして更に強調すべき基本的なことは、学生たちが人間として成長してゆく、その最大の機会を提供しているということです。これは、立教大学がキリスト教にもとづく人格陶冶を目指していることから、ご理解頂けるのではないのでしょうか。

大学としても文学部としても、リベラルアーツとその実践的に学ぶ場の一つとして「実習」という形態をさらに大事にしていきたいと思っています。とりわけ、この会場には現職の先生方も多いと思いますが立教大学の学生に関しまして、これからもよろしくご指導をお願いします。

どうもありがとうございました。

基調講演
「立教の今と資格課程」
寺崎昌男
(立教学院本部調査役)

◆**司会(大野 久)**：続きまして基調講演に入りたいと思います。今日、基調講演をお願いしている寺崎昌男先生です。

寺崎先生は現在、立教学院本部教育改革担当調査役、大学総長室調査役、それから東京大学名誉教授、桜美林大学名誉教授、そして大学教育学会会長、日本学術会議連携会員などをされていらっしゃいます。ご経歴は1932年に福岡県にお生まれになった後、東京大学大学院を出られて、野間教育研究所を経られて、最初に大学の教員として教壇に立たれたのが立教大学の文学部教育学科でした。その後、東京大学に移られて、教育学部長ならびに東京大学附属中・高校長など歴任、そして再び立教大学に戻られました。立教大学では教職課程に所属される傍ら、全学共通カリキュラムの立ち上げにご尽力いただき、全学共通カリキュラム運営センター部長をお務めになられました。立教大学ご定年ののち、桜美林大学大学院を経て、現在、立教学院本部調査役、大学総長室調査役に加え大学教育開発・支援センター顧問でもいらっしゃいます。

ご著書は、『大学改革』『大学の自己変革とオートノミー』『大学教育の可能性』『大学は歴史の思想で変る』『東京大学の歴史』など多数ございます。ご専門は、大学教育史でいらっしゃ

いますが、昨今、大学改革が日本中で叫ばれている中、先生は大学の歴史及び大学改革に関する深いご造詣をおもちのため、日本中でご講演なさっております。

昨年、大学教育開発・支援センターで連続セミナーを開いていただき、現在最先端の大学教育のお話をして下さいました。それが『大学改革 その先を読む』(東信堂)という本にまとまりました。

それでは、さっそくご講演をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

◆**寺崎昌男氏**：ご紹介ありがとうございます。

今日は、幸いにして皆さん方にお目にかかれるという機会に恵まれました。教職課程、そして、教育学科の卒業生の方々は、私にとって大変懐かしい方たちです。同時に、教職課程を含む学校・社会教育講座は、立教では最後の勤務場所でしたから、非常に深い思い出がございます。

私が二度目にこちらに参りましたあと、5年の間に仰せつかった仕事は、全学共通カリキュラム運営センターというものをつくることでした。これはリベラルアーツの責任を持つ部局です。そこで、先ほどお話し下さった渡辺信二先生たちとご一緒にいろんな仕事をさせていただ

きました。「リベラルアーツと資格教育」というテーマで話して欲しいというご依頼については、そういう経験も踏まえてお話しできるかなと思って、壇に上らせてもらっているわけです。

与えられた時間もそう長くはありませんので、簡単に申し上げます。

★立教大学は今



まず、立教大学について自慢をしたいと思います。お手元にある新聞記事は、

2007年10月17日付の『朝日新聞』に出た記事です。記事の内容をご紹介します。

「90年近く経過しているというチャペル。礼拝堂の中に入るとステンドグラスから陽光が差し込み、オルガンの演奏が流れている。食堂はまるでハリー・ポッターの世界だ」。本当かなあとと思いますけれども、こういうふうに見ると見えるのですね。嘘を書いているわけではないのです、この記者の心象風景から言うと。この辺はちょっと褒めすぎかなあとと思いますが、4段目に書いてあることは本当です。「この2年で（受験生が）2万人も増えました」。2007年に8,791人、2006年に10,268人増えたというんですね。

これは、よその大学から見たら、気絶しそうな数字です。なぜかといいますと、ご承知のように、日本の少子化はとどまるところを知らません。「全入」の時代が来ます。「2007年問題」

とみんな言っていましたけれども、その2007年ももう過ぎようとしています。しかし、2007年に始まって、あと10年以上は同じ状態が続く。この問題が今年から始まったんですね。来年あたりには本当に全員が、行き先さえ選ばなければ大学に行けるという状態が確実にやって来ます。

その時に、何人ぐらい学生が受けてくれるか。これは大学にとって重大な数字です。全国を見てみると、入学定員の3倍は受けてほしい、3倍までは何とか志願者を集めたいと思っている大学が何百とあります。というのも、不思議なことですが、競争率3倍ということになると、それまでの水準がやっと保てるんだそうです。それを切ると、もうどんどん落ちていくという、そういう数字です。他の資料を見ますと、例えば立教大学の学生募集力という数字があって、朝日新聞が出している『大学ランキング』を見ると、全国大学のトップは立教です。つまり、志願者が過去5年ぐらいにわたって増え続けている大学という点では、立教はまことに日本一なんです。

それはどうしてかということは非常に重大な問題です。どうして去年から今年にかけて受験生が増えたのか、一昨年が増えた理由はわかっているような気がするけれども、今年になってなぜ増えたか。この分析が大事だと思います。

大野先生たちが大学教育開発・支援センターでなされた調査によると、立教大学をなぜ受けたかという理由の第1位は、「学部や学科に好みの学部学科があったから」です。「大学」であるからには、当然の数字です。しかし、他方、第2位は「景観がいいから」というのです。正

門から入ってきて両側にあるヒマラヤ杉などは大変な財産です。本当に1本1億円出してもいいぐらいの財産だと思います。キャンパスのたまたまい、そこから醸しだされてくるある種の雰囲気、実はこれが立教を支えているということさえできると思います。リベラルアーツというものが、豊かな感性というものの存在を不可欠とするならば、立教はいながらにしてそのごく基礎の部分に対するキャンパス環境によって支えられているということになります。ですから、キャンパスの風景というのは、決してばかにならないものなのです。

★リベラルアーツ教育と資格教育

今日、お話ししたいのは、そういう立教大学の中であって、資格教育というのはどういう位置づけを持つかということであり、これは、簡単なことのように、非常に難しいことでもあります。先ほど渡辺先生は、立教の中で例えば文学部では文学、人文学的教養を基本にして頑張っているけれども、それが資格教育とどう結びつくかということはまたもうひとつの問題だとおっしゃいました。私もそうだと思います。やや長い射程でこの問題を考えて話題を提供したいというのが、私の今日の主題であります。

第一に、教養教育に関してまず申し上げたいと思います。立教は何をしてきたか、今、何をしているかということです。

ひとつは、他の大学のほとんど真似することのできない「全学共通教育」というのを7年前に発足いたしました。発足して、もう丸8年になります。今の大学の世界では少しも珍しいカリキュラムではありませんが、10年前の日本

では珍しい試みでした。

それはなぜか。その頃の日本の大学では教養課程をどんどん廃止していたからです。国立大学には教養部というのがありました。教養部を置いている大学が新制国立大学の半分ぐらいあったんですが、それは10年前あたりまでに、制度として消えました。また、教養課程というのを置いていた国立大学もありました。しかし、それもほとんどなくなってしまったんです。わずかに残ったのが東大や広島大学のように教養学部や総合科学部を持っていたところ、それからICUのように教養学部だけだったところ、これだけは残ったんですが、あとは全部なくなりました。

消えた後でどうなったか。それまで一般教育を教えていた先生方は全員専門学部に分属されました。分属された後、一般教育課程を誰が担うか。なくちゃいけないとみんな思っているけれども、やっていくのは大変で、誰が担うかということになると、問題百出です。そこで、各大学はどうしたかということ、仕方なしに、「全学出動体制」という言葉を使いました。名古屋大学で言い出した言葉のようですが、あっちこっちでそれを言い出したんですね。

私の世代で全学出動体制なんて言われると、どうしても戦時下のことを思い出してしまいます。「全学勤労働員」とか「国家総動員体制」とかをすぐに思い出すので、いやだなあと思ってしまいます。幸い立教はそうではなく、全学が支える全学共通カリキュラムをつくっていきこうとなりました。「全学によって支えられる全カリ」、これを当時の塚田理総長は標語にされました。

そして、全く新しい、教養部でもない、教養学部でもない、一般教育課程でもない新しい全学共通カリキュラム運営センターというものをつくられたわけですね。普通、これは絶対成功しません。それをやったとしても、学部に入った先生が今更、一般教育の部分を受け持つというふうにはならないのですが、立教の場合は、本当に奇跡的だったと言っていいと思います、それが実現いたしました。

★立教のリベラルアーツ教育

今日の主題であります「資格教育とリベラルアーツ」を考えるためには、どうしても学士教育課程4年間の間に何ができるか、どこまでできるか、これをまず考えなくてははいけません。それから、4年間の間の色々な学びの機会をどういうふうにするか、これをどうやってつくり上げていくか、これが大事です。カリキュラムというのはそういうものであります。目標があって、広がりがある、順序性がある、それらを考えて設定した授業が有機的につながっていったものがカリキュラムだからです。

その新しい教養教育カリキュラムをつくっていくという大仕事の前に立った私どもは、いろいろなことを工夫いたしました。細かいことを言う時間はありませんが、とても他の大学ではできないことを立教では様々な工夫をしたわけです。その結果どうなったか。例えば英語教育の体制はすっかり変わりました。1学級30人以下を目標とする。最大でも35人としました。当時は、1学年に3,500人入学していましたから、100クラスをつくらなければいけません。そうすると、それに見合う先生を用意し、さら

にそれに見合う教室をつくる。大仕事だったのですが、それが実現したのです。今もそれは続いております。少人数化というのは改革の一番大事な作業です。言語教育に関して、まずそれをやりました。

そして、従来の英語の水準や教え方ではなく、もっと新しいものをつくろうとしました。渡辺先生のお話にもあったように、かつての「英語の立教」という姿を何とか復活できないか。このように話し合って、実現いたしました。本当に驚くような協力を英語の先生方がなさって、英語教育の充実が図られたわけです。英語だけではありません。ドイツ語、フランス語、それから朝鮮語あるいはその他、中国語はもちろん、スペイン語とあらゆる語学を飛躍的に充実させることができました。また総長はじめ立教の最高意思決定機関も、私どもをサポートしてくれました。

もうひとつ、自然・人文・社会と3つに分かれていた一般教育科目の3つの区分は廃止し、新たに6つ（最初は7つでしたが後に6つになったと思います）の、新しい区分をつくって、それを全学が支える体制になりました。

それから、ふたつめとしてよくどの大学でもやっていますけれども、数人の先生が協力してテーマをつくってやるという総合科目をつくりました。複数教員担当による総合授業です。これも全学が協力していただきました。新しいテーマで「仕事と人生」とか「自然と環境」とか、いろんな新しいテーマが出てきて、初年度から12科目をつくることができました。

こうしたことは、まさに奇跡的なことでした。どうしてできたかということになると、私

は、立教大学が持っている、「宝」というものを感じざるを得ませんでした。それはどういうことか。立教大学が基本的に共同体であるということ。まさに学生と教員が織りなすひとつの有機的なつながりを持った団体であり、経済的理由に基づいて、あるいは外側からの要求に基づいてつくられた大学ではないということです。これは、130年の歴史がつくり出したとしか言い様のないものでありますが、立教ではそれが共通カリキュラムを実現させました。

立教の中に学生の好きな先生が実はものすごくいらっしゃるということも、全カリをつくっていきながらわかりました。私は、出戻りをして帰ってきてからの立教生活で、ずいぶん大学というものの本質について学ばされました。

★専門性に支えられた新しい教養人の育成

2番目は、4年間で何をやるかということですが、私は以下のように考えて先生方にお話ししました。それは、「4年間で育てるのは何か」ということです。

それまで、新制大学は何をやるかということ、「教養のある専門人」をつくることであると考えられてきました。日本ではみんなそう思っていた。産業界もそう思っていたし、教授たちもそう思っていたし、社会もそう思い、学生たち本人もそう思っていました。一般教育をとにかく受けて、その上で専門教育をやって、「学士」になって卒業するんだと思っていたのです。それが普通の考え方でした。でも、私はそれじゃいけないと思いました。

そのように考えていたのでは、とても全学共通カリキュラムというような教養教育は支えら

れない。どう考えたらいいか。私が当時たどり着いた結論は、4年で卒業するまでに大学がやるべきこと、学部すなわち under graduate の段階で大学がやるべきことは「専門性に支えられた教養人をつくること」だと、はっきり思い定めたほうがいい。「教養人」という場合、その教養の中身をどうするかは、立教で考えていけばよい。新カリキュラムをつくるのですから、「新しい教養人」というように「新しい」という言葉をつけて考えましようと思しあげました。

これは実は、大学の先生方にもそれまでに薄々わかっていたことなんですね。理学部の先生は、4年間で理学を教えられるはずはない。だから、一般教育を短縮するか大学院を拡充していこうとされていました。法学部の先生や経済学部の先生も、そう思っていました。4年間で専門を完結できるはずはないが、卒業させなければいけない、それではということで、カリキュラムをなるべく整然としていこうと。整然化の結果、教養教育部分は外していく、リベラルアーツなんていうのは外していく、ということが全国の大学で起きていました。

つまり、実は4年間というものでは専門教育の内容は達成できないとみんな知っていた。しかし、言い出せなかったのだと思います。立教の場合、さっき申しましたように思い定めますと、ことからは非常にはっきりしてきました。4年間かけて教養をどうつくっていくかということ、腹を据えて考えることができる。それから、「新しい教養人」をつくるのだと思い定めるといことで、実は大学教育の新しい任務がわかってくる。そのようになってきたの

だと思えます。

しかし、少数の異見がありました。それは、「教養のある専門人」を、どこがつくるんですか、という質問でした。これは批判的な質問です。それには私は、「それこそ大学院がやりましょう」と申しました。大学院というのはそういう場所です。「教養のある専門人」をつくる、これが大学院の目標であって結構なのです。やがて立教も大学院が増えていくでしょう。そのときに、大学院の目標は教養ある専門人をつくっていく。専門人だけ教養がなくてはだめですよというふうになっていくでしょう。その後、実際そうになりました。ロースクールや独立研究科等々、立教でも新しい大学院がどんどん増えています。この大学院はみんな、学部段階の教養教育のベースに基づいた専門人をつくる組織として拡大しつつあると私は思います。

★資格教育とは

さて、そういうふうに「専門性に立つ新しい教養人の育成」をめざして大学教育を考えていくと思えば、では、資格教育はどうなるかという話になります。

歴史的に見ますと、「教養」と「資格」は違うというのは、ヨーロッパもアメリカも含めて概ね大学の常識なのです。私たちは、教養教育と専門教育が対立するように思っていますけれども、そうではありません。大学の歴史の中で、教養教育と対立し、対比されるのは何かというと、職業教育です。その職業教育の中の社会的な承認を得た部分が、プロフェッションへの教育です。プロフェッションへの教育すなわち資格教育は、実はリベラルアーツとは対立するも

のとして、歴史的には動いてきました。

しかし、日本の場合、それをそのように考えてよいか、という問題があります。またどう調和させるか、という問題があります。残された時間内で、その二つに触れたいと思います。

一つは、日本で果たして大学史の常識の通りに考えてよいかということです。それは相当な無理があると私は思っています。なぜなら、日本の大学の歴史は約130年から140年ぐらいに過ぎません。その140年ぐらいの間にヨーロッパの大学が生きてきた900年の歴史を、息をきらせて私どもはつくってきました。つくってきた中で、大学は専門教育をやるところだという観念は、口で言うほど簡単に消えない実態として存続してきました。どうしたらよいか。今、私どもが140年の歴史の中で受け取ってきた「専門教育」も実は教養だと思うことです。

つまり、極言しますと、専門学部で行われている専門教育も、全学共通カリキュラム運営センターの責任のもとに行われている教養教育も、両方とも学生にとって教養を深める手段であることにおいて全く変わりはないと考えることです。では、それ以外の専門教育はどうなるか、その専門教育の中で一番組織化された資格教育というのはどうなのか、という問題が残るわけです。

突き詰めていうと、医学教育のように他より長い期間行う。獣医学もそうなり、薬学もそうになりました。こうした専門教育は、年限が延びつつあります。徹底的にいえば、恐らく今の学校・社会教育講座は、学部を終わった人たちだけが2年間、あるいは3年間在籍する期間というようにならないと、論理の筋は通らないと思

います。

しかし、今、そういうようにできるか。それはできません。他の課程と違って、例えば教職をいきなり立教がそうした場合、教職課程は成り立つか。私は、今のところ成り立たないと思います。予想すると、他の大学では大卒の学士で教員資格が取れるのに、立教では修士でしか取れません、といったら、志願者はなくなるでしょう。

やはり今のところは仕方がないけれども、しかし、資格教育とリベラルアーツの教育をどう両立させるかについて、私どもとして新しい答えを用意しておかなくてはいけないと思います。

言葉を換えて言うと、立教の中のリベラルアーツの教育、および専門教育を教養教育というふうに中身を組み換えていった新しい教育の二つを、どういうふうにして資格教育と両立させるか。資格教育の側からいうと、大学の中にあって資格教育を行うという課程をどういう論理で作り上げておくか、ということだと思います。

かつて私が2度目に教職課程に来たときに、学校・社会教育講座登録ガイダンスで、最初に挨拶された当時の講座委員長が言われた言葉を覚えております。それは「大学は資格を与えるところではありません。しかし、教職課程は置いていますから頑張ってください」。その言葉を聞いて、私は冷水をあびたような気持ちになりました。「大学は資格を与えるところではありません」。そこだけとればたしかにその通りです。しかし、資格をとる課程として大学の中にある以上、上の2つをどう両立させる

かを考えておく必要があると思います。

私が思いますのは、リベラルアーツの部分で4年間で全部終わり、4年間で資格教育も終わる、というふうに考えていくだけでは無理だということです。そうではなく、別の考え方があっていいのではないのでしょうか。

それはどういうことか。結論的にいうと、第一に、大学教育カリキュラムの総体の中で、専門教育とリベラルアーツ教育の一体化をはかっていく努力を惜しまないで進めていくことです。つまり一方で新しい教養教育を創り出しながら、他方で、専門教育を「人間のための知」の教育に変えていく努力をしていくことです。

そして、第二には、大学教育そのものを生涯にわたる学習(生涯学習)の第一ステージとして捉え直す。別の言葉で言いますと、「生涯にわたる専門職者としての歩みの中に、大学での学習の総体がどう生きるか」という目で、大学教育を見直してみることです。

学校・社会教育講座では、教員・司書・学芸員・社会教育主事の4種の専門職教育が行われています。その中で一番古いのは恐らく司書だと思います。歴史的に見ると、図書館の歴史と共に古いですね。司書という資格でプロフェッションに従事しておられる。その次に古いのが恐らく教職ではないのでしょうか。そして、次に来るのは博物館のキュレーター(学芸員)という仕事ですね。そして、最後に来るのが社会教育主事です。

今、立教が現に行っているプロフェッション養成の機関はこの4つをターゲットにするものですが、教職とキュレーターと社会教育主事は、いわゆるニュー・プロフェッションといわ

れるものに入ります。司書だけが、より伝統的なプロフェッションです。立教の場合、この4つのプロフェッションの中に人材を送り込んでいるということになります。そういうベースの上に、先ほどのリベラルアーツ教育とプロフェッションのための教育との両立を考えていくとすれば、私どもは大学卒業の時点までで話を切るのではなくて、人生全体の生涯を通じての学習の中に、リベラルアーツ的な教育の部分と、それから、クオリフィケーション（資格要件）を満たすための内容とが絶えず交互に出てくることを考える必要があると思います。

★反省する実践人

何を言いたいかというと、本当に専門職者として生きていくためには、いろいろな実践、すなわち教員だったら教育実践、司書だったら司書としての実践、この実践をくり返していくなかで大学までの学習をどう生かしていくか。あるいは、ここで本当のプロフェッション（専門職者）になっていくためには、大学卒業までにどういう教育を受けておいたらよいか。その学習の中身としてリベラルアーツ的な教育というのはどう役に立つか。こういうふうに見ておく必要があると思います。

この点を非常によく考えていると思うのは、アメリカの学者たちです。私の友人たちが紹介しているドナルド・ショーンというアメリカの学者がいます。『専門家の知恵』（ゆるみ出版）という邦訳が出ています。これは大きな本を抄訳した本で、訳者のひとりには以前に文学部心理学科におられた秋田喜代美先生ですが、皆さん

もぜひお読みになることをお勧めします。

専門家が本当の専門家になるためには何が必要か。実はリベラルアーツが必要だと書いてあるんです。この中で、ショーンは、専門職者の使う知恵というものについて、論じています。

すなわちそのひとつは、ノウイング・イン・アクション（knowing in action）である。しかし今後必要なのは何かというと、それはノウイング・リフレクション・イン・アクション（knowing reflection in action）であり、それから同じように、リフレクション・イン・プラクティス（reflection in practice）である。こういうものが今後絶対に必要だと言っているのです。

私はこの議論に、発表された頃から注目しておりました。

教職に限って言いますと、先ほど見た22歳の時までにやったことは何かというと、それはノウイング・イン・アクションなのですね。「行為をするために何かを知ること」です。すなわち行為の基礎になる知識は、私たちが一生懸命に「教育学概説」や、「生活指導の研究」で教えてきたことです。あるいは専門の先生が「国語科教育法」、「英語科教育法」で教えられたこと、それはノウイング・イン・アクションです。

ところがリフレクション（reflection）というのは違います。これは、実際に専門家として行動していきながら、その中で行う反省なのです。訳者たちは「反省的熟考」とっておきます。反省的熟考、これが必要だということは教職に就いた方ならすぐお分かりになると思います。クラスである教材を教える、この子に対して生活指導をしていく、どういうふうクラス

をもっていく、こういうときに必要なのは、熟考を伴う絶えざる反省です。反省なくして本当の教師になることはできない。

シヨーンは言います。これをやるときに一番必要になってくるのは何かというと、必ずしも教育学的な知識ではありません。例えば、子どもというものがわかっていなければ生活指導はできない。それを反省することはもっとできない。文学の歴史がわかっていなければ、この教材をどういうふう子どもたちに伝えるか。授業の反省はできない。

言葉を換えていうと、どの分野もそれぞれアクションと共にプラクティスをやっていくのが専門職である。そして、そのプロセスの中では行為を絶えず反省する必要があるけれども、その基盤になるのは、広い分野の知識を持ち、子ども理解の能力を持ち、文化を理解していく能力、科学を考えていく能力を持っていないとできないということです。

大学というところが資格を求める人たちに対して行うことは二つあります。ひとつは、ノウイング・イン・アクションです。すなわち資格の基礎を教えること。これはきちっと教えなくちゃいけません。しかし、その後卒業者が必要性に直面するのは、リフレクションです。そのリフレクションのための力を、4年間でどうつけるか—こういうふう考えていくべきだと私は思います。

レジユメの最後に、「生涯にわたる専門職形成」「生涯学習・生涯発達の観点からのリベラル・アーツとの循環的効用」と書きました。これはそのことを意識しております。つまり、両者とも、現代の大学が引き受けるべき仕事である考

えられるのです。

専門人になってからの勉強の仕方、これにはいろんな方法があるでしょう。大学院に行くという方法もあり、職場で研究するという方法もあるし、独りで頑張る、あるいは仲間をつくるという方法もあるでしょう。いずれにせよ、いろんな形で専門職としての成長と広がりベラルアーツの学習との循環を実現しておく必要があると思います。

私はかつて国立大学で学び教えてきたこともある身ですけれども、私学の場合は非常に有利だと思います。最初に申しましたように、人間的理解というものが養われ、感性が磨かれる環境が国立よりあると思います。自然にある、これが大事です。

全カリが「自然」にできあがったように、自然が与えた、そして歴史の中で保たれた環境を生かしてやっていくことは、教育の側の務めでもありますし、卒業された方たちは、立教で学ばれたということを支えにして下さって結構です。それはまさに大きな支えになりうるものではないかと思っていますのでございます。

ちょっと時間を過ぎましたが、これで話を終わらせていただきます。

ご静聴、ありがとうございました。

<< シンポジウム「学生時代の学びとわたしの今」 >>

シンポジスト：

- 寺西 裕子 氏 品川区立平塚中学校教諭・主幹 担当教科は国語科
1984年3月 文学部日本文学科卒業
- 大熊 俊之 氏 埼玉県立庄和高等学校教諭 担当教科は地理歴史科
2003年3月 文学部史学科卒業
- 阿諏訪 青美 氏 横浜市歴史博物館学芸員
1995年3月 文学部史学科卒業
2001年3月 文学研究科史学専攻修了
- 鈴木 均 氏 浦安市立図書館主任司書
1995年3月 文学部英米文学科卒業
2004年3月 21世紀社会デザイン研究科
比較組織ネットワーク専攻修了
- 田中 徹 氏 江東区教育委員会社会教育主事
1986年3月 文学部教育学科卒業
現在、21世紀社会デザイン研究科
比較組織ネットワーク専攻1年次在学
- 司会：下地 秀樹 (教職課程)



◆司会(下地秀樹): それでは、後半の部のシンポジウムを始めさせていただきたいと思います。

私は司会進行をさせていただきます教職課程教員の下地秀樹と申します。よろしく申し上げます。

さっそくシンポジストの方々をご紹介しますと思いますが、皆さんお手元の「資格教育とリベラルアーツ」というパンフレットのシンポジウムの部分をご覧ください。

今、寺崎先生から資格教育の今後について基調講演をいただきましたが、今日はですね、お越しいただいた方々から、「学生時代の学び」というものを、今現在、資格をそれぞれ生かされてご活躍の中で振り返っていただいて、寺崎先生が先ほどおっしゃった絶えざる「反省」という意味の「反省」と重なりながら、もう少し長いスパンをとってのお話というか、リフレクション(reflection)をお願いしたいと思います。

お手元の資料をご覧ください。1967年から40年間で一体どのくらいの方がこの学校・社会教育講座で学ばれたのかなということをちょっと調べてみたら、複数の課程を終えられている方もいますが、総数で約16,000名でした。ですから、1年400名平均で課程を終えられてきたわけです。

そのうち、教職課程だけで10,268名です。おそらく、もし教員免許や卒業証書と別に課程毎の修了証みたいなのを発行していたら、昨年の修了者の中の誰かが、「ちょうどあなたは10,000号です」ということで、くす玉でも割らなければいけなかったところなのでしょうけれど、

ども、昨年度にはちょっとそういうことは思いつきませんでした。そのくらい多くの方が学ばれたわけです。

今日はこのような多数の修了生のなかから、比較的近年に修了された方5名に話題提供をお願いいたしました。

皆さんから見ると一番左手の方からご紹介いたします。

寺西裕子さんです。寺西さんは1984年に文学部日本文学科を卒業されて、現在は品川区立平塚中学校の先生でいらっしゃいます。

そのお隣は、大熊俊之さんです。大熊さんは、この中では一番最近の卒業生で、2003年に文学部史学科を卒業されて、埼玉県立庄和高校にお勤めです。現在、高校教師になって5年目とのことです。

そのお隣は、阿諏訪青美さんです。阿諏訪さんは、1995年に文学部史学科を卒業されて、そののち大学院に進まれ2001年まで在籍していました。現在、横浜市歴史博物館学芸員になられて5年目を迎えておられます。

そのお隣が鈴木均さんです。鈴木さんは、1995年に文学部英米文学科を卒業されて、現在は浦安市立図書館の主任司書をなさっています。ごく最近まで本学の大学院21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻で学ばれておりました。

最後になりますが、田中徹さんです。田中さんは1986年に文学部教育学科を卒業されて、江東区教育委員会で社会教育主事をなさっています。また現在、鈴木さんと同じく21世紀社会デザイン研究科比較組織ネットワーク学専攻で学ばれている現役の大学院生でもあります。

それでは、まずはそれぞれの方からシンポジウムのテーマ「学生時代の学びとわたしの今」に沿ってお話いただきたいと思います。その後でフロアの皆さんからいろいろと忌憚のないご意見やご質問をいただければと思います。そしてそれに応えるような形で、また話を補足していくということでシンポジウムを進めさせていただきますと思います。

4 課程ありますので、5 人の方々においでいただきました。それぞれいろいろと違いがあるところが、むしろ話として膨らみやすいのではないかと思いますので、まずは先ほどの紹介順にお話しいただければと思います。

では、寺西さんからお願いします。

◆寺西裕子氏：皆さん、こんにちは。寺西裕子です。卒業してなんと 25 年、東京都の教員になって 25 年目ということで、ついこの間、石原慎太郎の名前入りの賞状を頂いたりして、ずいぶんあっという間に経っちゃったなあという感じがしております。

私は現在、品川区立平塚中学校というところで昨年主幹として勤めております。品川区は特に小・中一貫校というのをつくっているところで、平塚中学校も平成 22 年（2010 年）に小学校と中学校が統合いたしまして、さらに保育園と幼稚園もくっつける計画があるので、0 歳から 15 歳までという学校をつくる計画をしております。そこで、小・中一貫統合担当主幹ということで働いております。

立教大学時代には、教職課程と学芸員課程の二つを取っておりました。どっちかというと、その時は先生になる気はなく学芸員の方を一生

懸命に出ていました。巡検に行ったり実習に行ったりして、特に明治村に見学実習に行った時に、中川先生

と一緒だったんですが、寝食を共にしながら明治村がこれから生き残るためにはどうしたらいいか、みたいなことをみんなで話し合っ、提案を出し合ったりしたことをよく覚えています。

私は最終的な職業選択としては教師を選びました。そのきっかけとなったこととお話ししたいと思います。私が学生の時に、チャプレン室が企画している立教キャンプというのがありまして、それで沖縄のハンセン病療養所の愛楽園というところに 3 週間ぐらいキャンプに行きました。その時は、単に沖縄に行ったことがなかったもので、行ってみたい程度のことだったのですけれど、実際にハンセン病の療養所の中で 15 日間ほど生活して行く中で、やはり、社会から隔離され、いわば疎外された方々のたくましい生き方とか、命の大切さなどをいろいろと考えました。その時に、ここで体験し、経験したことを伝えていく仕事をしないとイケないかなという気になったのです。

同時に、一緒に行った同じ大学生のメンバーたちと話しているうちに、今までわかったような顔をしていたけれども、全然お互いのことを深く知ろうとしていなかったということにも気がつきました。そこで、やっぱり人間関係を



もっと深めていく、本当に仲間同士がもっとつながっていかねばいけないんだ、ということにも気づいたのです。その時初めてこういうことを考えました。今まで余りにも知らなかった、隣にいる仲間ですえよくわかっていなかったのだということに気づかされたわけです。

このような体験をした数ヶ月後に教育実習に行きました。当時はちょうど東京の中学校が大変な時代だったのです。中学校で先生が刺されたとか、蹴られたとか校内暴力が頻発していた時代でした。ですから教育実習に行くときは、半分は教師にはなりたくないというか、正直なところ教育実習自体が行くのもちょっと不安でした。そこで日本文学科で指導を受けていた先生方に相談したら、「もし先生にならなかったとしても、親になった時に絶対、教育実習の経験は役に立つからね。行ってきたらいいよ」とか「子供たちに迷惑をかけるとかそういうことではなくて、精一杯2週間過ごしてきて、そこでまた何か新しい発見があるかもしれないから、行っていらっしゃい」とアドバイスや勇気づけを頂きました。そして2週間、豊島区内の公立中学校で国語科の教育実習をおこないました。そこで子どもたちから受けた影響もあり、大学4年の6月から教師を突然、目指すことにしました。本当に7月の東京都の教員採用試験までの約1ヶ月は一生で一番勉強したかなと思うぐらい勉強いたしました。

教師になってからは、上越教育大学大学院に派遣していただいたり、ハンブルグ日本人学校へ行かせていただいたりして、色々な経験をさせていただけたかなと思っています。

そして教師になっても常々思うことは、私に

とって立教は母校だなあ、と実感することです。それは私が教師になった根源をつくったのがやっぱり立教だったから、ということでもあります。特に、先生方と非常に近い関係でお話しすることができたことは、とても良かったです。たとえば私がいた日本文学科は30人クラスでした。その中でゼミというともっと少ない人数になりました。また、教職課程や学芸員課程もいろいろな学部学科の学生と一緒にいましたので、自分の限られた日文の知識だけではなくて、理学部の方や法学部の方たち、その他色々な方たちと話をするなかで考え方とか話題とか、その方たちの経験とかをいろいろ伺うことも刺激になりました。授業のことで今でも覚えているのは大学1年の時に一般教育科目の法学を取ったときのことです。その授業の中では判例を扱っていました。その判例のなかでたとえば、「自分の可愛がっていた犬が殺された」というものが示されると、私は本当に情緒的なので、「あっ、かわいそう」といった方向でしか考えられなかったのですけれど、法律の立場から法律によって裁いていくという、考え方を知ると、なるほどなあ、と自分の視点以外の視点を学ぶことができて、そういう点ではすごく論理的思考力がその授業などをきっかけに身についたかな、と思っています。

このようなことを振り返ってみると、立教にお世話になったおかげで今の自分があるのだな、と改めて思います。今、自分が大事にしている仕事は、中学校と小学校をつなぐ架け橋になろうということです。そこではやはり人間関係をすごく大事にしていきたい。そのためには、コミュニケーションを十分にとるということが

何よりも重要だと思っています。そしてこれが今の私に与えられた課題なのかな、と思っています。この課題をやり遂げるときにも立教で学生時代を過ごした時の様々な経験、なかでもいろいろな方々と出会い、語り合った経験が活きているかなと思っています。ご静聴ありがとうございました。

◆司会：どうもありがとうございます。

皆さん、いろいろご質問なされたい、もうちょっと詳しく聞いてみたいということがおありかと思いますが、まずは5人の方々にお話しただいてからそのような時間を設けたいと思います。

それでは続いて大熊さん、よろしく申し上げます。

◆大熊俊之氏：埼玉県立庄和高等学校の大熊と申します。よろしくお願いいたします。こういうところで話すのは初めてのような状態ですので、上手く話せるかちょっと自信がないのですが、おつき合いいただければと思います。

先ほどご紹介いただきましたように、大学を卒業したのが5年前で、私は今5年目の教員をしております。「学生時代の学びとわたしの今」というお話なのですが、学生時代を振り返りますと、本当にこんなところでお話しをしているのかなあというくらい勉強はせず、この教室で授業を受けた思い出もいっぱいありますが、大体座るのは扉のすぐ前辺りで、大丈夫だろうなと思っていたんですが、ここから見ると丸見えなんだなあ、今、すごい慙愧の念にかられているところです。私は、今、庄和高校という学

校に勤めています。庄和高校は埼玉県の春日部市というところにある学校です。庄和町という町、大凧が有名な町です。すぐ千葉県に行ける学校なのですが、昨年、春日部市と合併というか、限りなく吸収に近い対等合併で消え去りまして、現在は、春日部市の学校になっています。

過去は、恐らくこの大学にも入学するような生徒さんもいらっしやったような学校だったようですが、今は、勉強は嫌いだなあというような子が多い学校です。想像していただければわかるかと思うんですけども、ちょっと勉強を教えるのが大変な学校です。生徒も、いろいろな子がいて、時々はかちんと来る態度振る舞いもありますが、概ね我々の言うことを聞いてくれ、我々の方を見てくれる子が多い学校です。

こういうことをお話しするのが本当に初めてのなもので、何を話していいのかわからないですが、学生時代を振り返って、そして今の仕事ということでお話しさせていただきます。私は非常に恵まれているといえますか、高校の採用試験に一度で合格を致しました。その時の採用状況は、私は地理歴史科ですが、地理歴史科の採用数が4名で、公民科が2名で社会科系では合計6名の採用でした。倍率は60何倍とかいう倍率でした。必ずそう言うと、すごいね、すごいねとか言われますが、実は自分自身、なんで受かったのか未だにわからなくて、本当に怖くて、怖くてし



ようがないのも事実です。なんでこのような話をしたかといいますと、先ほどの寺崎先生のご講演で、「大学は資格を与えるところではない」というお話をうかがいまして、私は反省、反省、反省ばかりでした。実は私は、大学に教員の資格を取ることを目標として進学したのです。

ですから、大学では卒業に必要な単位を取って、教職課程を取って、あとはそれなりに落とさない成績を取ればいやぐらいの感じで大学生活を送っていました。教職課程を取らせていただいたのですが、その時も、非常に生意気な学生だったので、これって学校現場でそんな直接結びつくことなのかなあとか生意気なことを思いながら教室の隅っこの方で授業を受けたり、受けなかったりしていました。そして大学3年の終わりぐらいに教員採用試験対策をおこなっている某出版社の採用試験対策講座等に出掛けたり、通信教育を受けたりして、教員採用試験というのはこういうものなんか、なんだ、大学で全然教えてくれないなあ、大学でやっていることは何なんだろうなあとか、考えていた学生でした。そんな形で本当に生意気に思いながら採用試験の勉強ばかりしていたこともあって教員採用試験に受かりました。

そして今日このシンポジウムで、お話ししなきゃいけないんだなあ、とここに来るまでの電車の中で考えていたのは、学生時代の教職課程の授業というのは、今思うと、こうだったのだなあと思わされるが多かったなあ、と本当に思ったんですね。

もちろん、採用試験の試験科目の内容は、私は埼玉県採用試験を受験したので埼玉県教育行政のことですとか、学習指導要領の内容で

すとか、もちろん、法規的なものですか、今の仕事に結びつくものも多いのです。しかし、大学で学んだことっていうのが、何がって言われたら困りますが、でも、今思うと、そうだったんだなあ、これはこうだけど、こうだったんだなあっていう、なんていうか、抽象的で申し訳ないんですけども、授業を受けていてよかったなあって今は本当に思うんですね。あの時、大学の時に本当に仕事に直結した勉強じゃなくて、もっと深い勉強をできたことはよかったのかなあとと思っています。

今、就職をして、周りにはいろんな大学を卒業した教員がいます。他大学はどのような教職課程の特徴があり、どういう勉強をしているのかわかりません。やはり国立大学など教員養成系の大学ですと、本当に非常に学校の現場に近い内容の勉強をしていることもあったりするようです。そういう科目や内容を受けてこなくてよかったのかなあ、というふうに、よかったのかなってことは、何がいいかわからないんですけども、思う時が多くあります。

なぜかと言うと、私は初任校が実は高校ではなくて特別支援学校でした。聾学校、聴覚に障害をもつ子どもたちの学校でした。立教には当然ながら特別支援教育の課程はありませんし、当時は、授業の中でも詳しくは扱っていませんでした。ですから特別支援学校にいきなり配属になりまして、「うひゃあー」と思いました、正直なところ。もちろん、周りの同期は国立大学で特別支援教育の課程で学んだ者ばかりだったのです。

でも、職場で同期や先輩と話をしていたりすると、立教の教職課程では学問としての教育で

すとか、人の育ちということからの教育など、もっと幅広い意味での教育について学ぶことができている、それが直接的ではなくても自分の教養としての深まりに大きく役に立ったのかなあと思うことが多くありました。今は本当にそうわかった。今だからこそたくさん勉強したいな、本当に勉強したいなというふうに、あの頃の反省に立って思っている今日この頃です。

いろいろと教えていただきたいことがたくさんありますのでよろしくお願いします。以上です。

◆司会：ありがとうございます。先ほど、寺崎先生のお話で、全学共通カリキュラムのことがありましたけれども、この中ではですね、その新制度のもとで学んだのは大熊さんお一人です。

寺崎先生のお話はカリキュラムということですが、寺西さん、大熊さん、それぞれですね、もちろん正規のカリキュラムは大事ですが、むしろ、立教はいろいろ正課外の活動を用意しているということにも特色があります。大熊さん、もう少しだけ補足していただきたいのですが。学生時代に勉強の上では苦労されたと…あっ、苦労というかあんまりやらなくて、今、後からもっとやっておけばよかったということなのですが…。私は大熊さんの印象として、ご本人はどうして採用試験に受かったのかわからないということなのですが、非常にタフな方なんだろうと思うんですね。そういったことで、学生時代、ここ立教に来ていたから思い出すような、授業のことだけに限らず、

何かエピソードはありませんか。

◆大熊氏：立教大学大好き、なんです、私は。今でも本当に誇りの母校です。私は埼玉県に住んでいるもので、池袋は非常に通いやすくて大好きで、ラーメン屋さん、ここはおいしいんだなあとか、行列の中に混ざったりとかしてたり、ほんと遊んでばかりでした。

下地先生の授業も受けさせていただいたことがあります。非常によく覚えているのが、「道徳教育の研究」という授業でした。一番最初の授業が「道徳教育ってほんと、できんのかねえ」みたいな感じのお話だったんです。それで、「ええーっ、なんだ、こりゃあー」とか思いながら受けていたのです。やはり国立大学なんかですと、いわゆるまっとうに道徳教育の歴史や理論などを勉強したりしているようなのですが。なんかそういう違った視点から見ると、まあ国立大学でもいろんな先生がいらっしゃるんでしょうけれども、必ずしもオフィシャルな視点とは違う視点の授業が全カリの科目も含めて立教では多かったのかなあと、今思います。

とはいえ、その頃はまずは教員になりたいと思っていたので、そういうのは無駄だなあとか、いらぬぐらいのことを思ったんです。教員に直結した色んな勉強をしたい、とか思っていたんですが、逆に今は、現場でそういう経験をしていますから、そうじゃなくてよかったのかなあと思っています。

むしろこれから、先ほどお話ししたように、勉強したいと思う基礎というか、取っかかりを大学と一緒に教えていただいたのかなあとというふうに思っています。ちょっと時すでに遅し

ですが、今だったら素敵な大学生になれるかなと思っています。

◆**司会**：ありがとうございます。

また後の方で何かご質問していただければと思います。続いて、阿諏訪さんにお話しいただきたいと思います。

◆**阿諏訪青美氏**：初めまして。横浜市歴史博物館に勤めております阿諏訪青美と申します。よろしくお願いたします。

私は2001年に卒業しまして、2003年から今の職場に勤めております。日本史の中世を専攻しており、中世のゼミに所属していました。このシンポジウムのお話を受けてどういうことをお伝えしようかなあと思っています。学芸員という博物館に勤めている人間に対して、どういうイメージをお持ちなのか、普通の方がどう思っているのか、色々だと思うんですが、私もまだ10代、20代前半ぐらいの頃は静かな施設にのんびり座って、ちょっと本でもめくったり、ちょっと解説をしたりしている人なんだろうというふうには思っていました。

しかし全然違い、座っている時間もありますが、ほとんどは立って働いております。最近自分でも上手くなったなあというふうに思うことがあるんですが、それは、モンキースパナとい

う工具、あれを回すのがすごく上手くなったんです。どうしてこんなにこれが上手くなったんだろうと思うくらい、そういう色んな作業に従事しております。この10月20日からは、「鶴見合戦」という展覧会を開いてきたばかりです。まだちょっと疲労が回復しきっていないなあと思っています。企画展をいろいろ立ち上げたりですとか、調査研究したりとか、収蔵品の管理なども、全て施設の管理も含めてやっております。

さて、立教で経験したこと、それから学芸員課程で経験したことについてお話をしようと思います。実際の日常業務の中で、特に専門分野の中で、学校で学んで役立っていることというのは、ほとんどゼミで勉強してきたことなんです。大変専門とつながりが深い職種であることは間違いありません。ゼミの中で調査に行き、それを報告書にまとめて、発表するというような、繰り返しを業務の中でも必ずやっておりますので、ゼミで学んだことというのは、大変深い。

それから特に、ゼミで夏の調査実習というものがありまして、日本史の中世ゼミ皆で関西の山奥のほうに調査に行きまして、聞き取り調査をいたします。ドクターの1年生ぐらいになりますと、その調査の全ての仕切りをさせられまして、学部の3年生から上は50代・60代の先生までを全部連れて行く。その仕切りというのは、宿を取ったり、飛行機を取ったり、お弁当を手配したり、車何台来るんだ、とかです。こうした様々な雑事も全て今の仕事に確実に生きているというふうには思っています。

それから、この学芸員課程の中で学んだこと

は、いろいろな実習に参加させていただいて、巡検実習ですとか、先程寺西先生のお話にもありましたが、見学実習、それから調査実習なんかがありました。私の時は、茨城県の牛久市に行き、石造物の調査をいたしまして、『牛久市の石造物編』という本になっております。あとは秩父ではたしか昆虫採集をしまして、そこで標本を作ることもしました。

大学時代には、学芸員にあんまり関係ないのではないかと、特に自然系の勉強はあんまり関係ないんじゃないかというふうに思ったのですが、そこで学んだ一つの大きなことは、いろいろな分野の人と交流ができて、物理の人もフランス語の人も英米の人も数学の人も法学の人もみんないて、その人たちが、博物館というものに対してどういうふうに考えているかというのをそこで学ぶことができたと思っています。その人たちは今でも交流があり、大変な私の財産になっています。

あともう一つは、学芸員課程の授業の中で、あれは確か実技実習といったかと思うんですが、巻物を触ったりですとか、掛け軸の扱いを学んだりとか、たった一日、五島美術館から人を招いてやった実技がありました。それ以来、今の職に至ってもなお、そういう扱いを勉強させてくれる所はないんですね。1回も立教で学んだ時以来、絶えてありません。今、我々がやっているのは、実は他館の人たちの扱いを見て盗んで、真似しているというようなのが実状で、たぶんどこでもそうだというふうに思いますので、あの実技実習は大変貴重だったなというふうに思っております。

あと最後に最近思っているのですが、

さっき寺崎先生のご講演の中で資格の話が出てまいりました。私も学芸員の資格を取っている中で、その資格を取る事と、実際にその仕事に就く事の間には、すごく大きな隔りがあるのだと実感していました。学生時代もそうだと思います。どのお仕事もそうだと思うんですが、資格を取ってそこに就く、採用試験があったりなかったりするような中で、その職に就くのは大変なことだと思っています。

ですので、ある考え方をすると、立教のようにいろんな分野の人たちに、例えば物理の人たちとか仏文の人に学芸員資格を取らせるというのはどうなんだろうと思ったこともあります。が、実際博物館に勤めていますと、昔、学芸員課程を取ったことがあるのよという人たちが来てくれるというのはすごく心強いことなんです。博物館の利用の仕方とか、どういうことをしている機関なのかというのを知ってくれている人がこんなにいるんだというふうに思うことは、我々にとって大変ありがたいことだと思いますし、大学でも進めていってほしいなと思っております。

ただし、最近、電車の広告なんかでいろんな大学の広告が出ていまして、いろんな資格が取れるとうたっているところが多いのではないかなと思うんですね。学芸員になれたり、司書が取れたり、そういうことを羅列しているものが多くて、何年前には早稲田大学が新聞の一面に学芸員になろうという広告を打っていて驚いたことがあります。そんなに需要は今のところないです。

ないのですけれども、ただ、実際に学芸員を取った学生さんにはぜひ話ししていただきたい

いなと思うのは、博物館に勤める場合に学芸員だけが全てじゃないのです。これはむしろほんの少数派でして、アルバイトさんから始まってボランティアさん、それからボイラーの人、警備の人、受付の方、それから運送業者の日本通運さん。美術専門の日本通運さんとかヤマトさんもいますし、あとは害虫駆除の方とか様々な業種の方が博物館、美術館に関わっておられます。そういう職に将来就く可能性のある学生さんたちにいろんな方向性を示していただければなあというふうに勤めながら思っております。

◆司会：どうもありがとうございます。申し遅れましたが、阿諏訪さんから社会教育領域の方が三人続きます。世間一般には、教職に比べればそれぞれの社会教育領域の専門職の方々の実際というのなかなか聞く機会が少ないかもしれませんので、そういうことも含めてお話しいただけるとありがたいなと思います。

それでは、続いて鈴木さん、よろしくお願ひします。

◆鈴木均氏：浦安市立図書館に勤めております鈴木均と申します。よろしくお願ひいたします。

私も学部は1995年に卒業いたしました。以来、浦安市の図書館に勤めてずっと図書館員として働いてきました。図書館員になりたいという希望は実は小学生の時からでして、大学に入る以前の段階から、自分とはとにかく図書館の人になるのだという決意を持っておりまして、学部に入る時にも、どうせ図書館員になるんだから、学生の時ぐらひは好きな本を好きなだけ読ませてもらうというぐらひな感じで、こちら



の英米文学科にお世話になりました。

ですから、とにかく司書の資格は取ればいいやというぐらひの

つもりで立教に入ってみたんですが、入ってみると、実は立教大学の司書課程というのは図書館の世界でもそれなりに知られたとても充実した課程で、自分なりに本当にここでよかったなと思える学生生活を送ることができました。特に、当時司書課程の主任をされていた河井弘志先生ですが、就職してから実はこんなに偉い先生だったのだということを実感するくらいですね、図書館学という学問自体がはなはだ学問としては未熟な部分がまだまだあるというふうにいわれている中で、日本の図書館学のいわば最高峰と称されることもあるような大先生に、実は学生の時にちゃんと教わっていたんだなということ、自分も就職して仕事をする中で、それこそ立教で司書を取りましたと言うだけで、「ああ、河井先生のところね」と言われるような、そういう思いをしました。そしてあらためて自分が学んできたことを、学生時代に聞いていた時にはすごい難しい話だなというぐらひにしかわからなかったことが、だんだんにやっと今ごろになって、河井先生に教えていただいた図書館学というのが、とても貴重だったということ、をわかるようになってきています。

そういう中で、10年間も図書館の仕事が続けてきた中で、やっぱりもう一回勉強してみよ

うかな、と思ったきっかけになったひとつの出来事が2000年に河井先生がご退職される時の最終講義をうかがいに、立教に久しぶりに来たときにありました。久しぶりの立教もいいもんだなあと学内を歩いていると、ふとポスターが目にとまりました。そこには今度大学院ができる。それも社会人の入れる大学院だぞ、ということが書いてあって、ほうほうと思いました。21世紀社会デザイン研究科という、正直、なんだこりゃあという感じだったのですが、大学院案内をもらって帰って、よくよく読んでみると、やはりよくわからないんですけども、わからないなりに21世紀の社会を考えるのだからということが書いてありました。私は図書館という仕事はまさに21世紀を考えている仕事だぞと自分なりに思っているものですから、図書館の話でもいいのかもしれないというようなことを考え、受験し、大学院に戻ってくる事が出来ました。夜間で社会人を受け入れていただいている大学院だったものですから、現職の仕事しながら夜間におこなわれる授業に通う事が出来ました。いろいろありましたが、2年間かけて自分にとっての図書館というのはどういうものか、というようなことを自分なりにまとめて修士論文を出して、修了することが出来ています。

この2回の学生生活はやはりとても刺激的で、いつでも勉強できるんだなあというのを2度目の学生をやってみて本当にわかったということと、それをちゃんと受け入れていただける立教大学という器はなかなか大きくて良かったと思っています。また、図書館の世界にも大学図書館学教育の大学院というのはあるのです

から、そういう大学院に進んでも良かったのかもしれないのですが、今ひとつそういう気にならなかったというのは、やはり図書館というものの自体が非常に器の広いものでありまして、皆さんの中にも図書館を日常的に使っておられる方もいらっしゃると思うんですけども、やはり図書館は何でもありの世界なのです。物理も化学も歴史も社会も、ビジネス書から赤川次郎まで全部揃っている世界という中で、どうやってそれをマネジメントしていくかということ考えると、図書館ということだけを突き詰めて専門的にやっていくと、おのずと図書館という専門的なことにならないという特殊な性格を持っております。そういう中で立教大学のようなまさに先ほどのリベラルアーツというのは、専門の殻に籠もって一生懸命専門的に突き詰めていくと、専門的にはならないのです。そういう部分が必要ではありますけれども、図書館というのは特に典型的にそういう部分もあるな、と思っています。

また図書館の世界というのは、私が就職したころから大きく変りまして、インターネットが普及をして、それまでの情報検索とか目録とかという方法論が一気が変わってしまった部分でもあります。深いところではもちろん、変わっていない部分はあるんですけども、公共図書館の現場のレベルでは本当に変わりました。私なんて就職して一回も目録なんて書いたことはないですし、目録カードすら見ていないという状態です。レファレンスというと、いろいろと辞書とか引っ張り出してお客さんにお答えすることはもちろん多いのですが、それ以前にまず、インターネットを使ってぱっぱと答える。あ

るいはインターネットを使いながら、他のものも一生懸命合わせて使うというようなことがどんどん必要になってきて、また進化している分野ですので、技術としての司書の仕事というよりは、図書館というものがこれからどんなふうになっていくのかという理念みたいなものをきちっと押さえておかないと、図書館の世界ではますます役に立たなくなっているという時代に来ていると思います。

特に、私が今勤めております浦安市立図書館というのは、図書館の世界では割合に知られた存在でして、人口16万人という小さな都市にしては充実した図書館を持っています。そしてとてもここが重要なポイントなんですけれども、図書館に就職した人が図書館の業務ができる、という全国でも稀な図書館なんです。

ここのところが実は司書課程のとても難しいところだなと思うのですが、先ほどの学芸員の方もおっしゃっていましたが、世の中に図書館というのはいっぱいあるように見えますし、東京都にもたくさん図書館がありますが、図書館で働いている人はほとんど司書ではありません。司書である必要も現行は法律的にまったくないので。例えば東京都には、正規で司書で働いている人は都立図書館にいますが、区立の図書館にはまったくいない状態なのです。こういう中では、最近、『朝日新聞』の格差社会特集などを見ると、公務労働の低賃金労働の典型が司書なのです。なぜかという、司書をやりたい人はいっぱいます。要するに、雇う側に関してはやりたい人は幾らでもいるので、低賃金で不安定な雇用条件のまま雇えるということから、非常勤職員のままで長期にわたって司書

業務をやらせているということが、多くの図書館でおこなわれていると言われています。そういう中で、正規雇用の職員としてきちんと司書を雇って、司書として一生ちゃんと勤められるような体制を整えている町っていうのは、全国で本当に指折り数えるほどなのです。

このような現状の中で、浦安市は幸いにして今のところ司書という採用の枠があり、司書として採用され働くことができる。自分なりのプロフェッションを意識して勉強したりできる状態にあります。これは本当に恵まれた状況で、全国的にはむしろ、ほとんどの場合は司書の資格は取ったけれども、司書として一生を勤めることはまずできないというような状態にあります。

このような現状の中で本当に司書課程の先生方はご苦労をなさっていると思います。しかし我々司書、現に勤めている司書たち自身が、司書の資格というのがどういうものか、司書の仕事というのはどういうものか、さらには図書館というところがどういうところか、ということをもっと明確に発信してこなかったというような反省もあります。ですから、たとえば本日のシンポジウムのような形で、いろんな分野の方とつながりながら司書の仕事について、発信していく、そして司書の仕事を対象化していくといったことがとても必要になっているのかなと思います。司書のポジションが厳しい状況のなかで、立教のような1,960人も司書を輩出している大学があるということは、いろいろな意味で図書館や司書を応援して下さっていると我々としては思えるのです。この中で本当に図書館の仕事をしている人は多分、恐らく何人も

いないのが事実なのでしょうけれど、2,000人
なりの人たちが図書館のことを知っていて、図
書館のことをわかっていてくれて、応援してく
れるかもしれないということが、やっぱり私たち
にとって大きな支えになっていると思います。

◆司会：どうもありがとうございます。また後
ほど、もう少し詳しいことをご質問していただ
ければと思います。今の実状というのも、私たち
も必ずしも知らなかったことですので。

では、最後になります。田中さん、よろしく
お願いします。

◆田中徹氏：江東区教育委員会で社会教育主事
をしております田中徹と申します。よろしくお
願いいたします。

今の鈴木さんのお話の中で、特に採用・就職
ということに関しては、社会教育主事の世界も
図書館司書とほぼ同じであるという思いで聞



いておりました。その辺の
話も最後で
したいと思いま
す。

私は、1986
年に文学部教
育学科を卒業
しました。2年間民間で勤めた後、1988年6
月に江東区教育委員会に社会教育主事として採
用されて、今年で20年目になります。社会教
育法にあるとおり、教育委員会の事務局に配置
をされており、何回かの係間の異動のみで20

年間生涯学習のセクションで専門職として勤務
しております。

学生時代をふりかえりますと、自分は教育学
科なので、社会教育主事課程の科目が教育学
科の科目とかなり重複しており、当時は比較的楽
に社会教育主事の単位がとれました。多分今は
社会教育主事課程の必修単位数は増えていると
思います。学生時代、私もあまり授業には積極
的に出ている方ではなかったのですが、この社
会教育主事課程の科目に関しては、教育学科の
科目より楽しく興味が持てて、よほどのことが
ない限りは出席していたように記憶してしま
す。資料の後ろの方に、先生方の名簿一覧が出
ておりますが、当時は岡本包治先生という社会
教育・生涯学習の世界では日本の権威、最高峰
と言われる方が中心におられ、自分も岡本先生
の授業を何科目か受講していました。岡本先生
は非常に気さくな方で、威厳みたいなものは
あまり感じさせない方でした。社会教育施設とい
う科目では実際に何箇所かフィールドワークな
どもしていただきながら、私たちに社会教育に
ついて興味を持たせてくれたように思います。

立教の教育学科ではご存じのように小学校の
教員免許が取れるのですね。これは、入学して
から知ったことですが、当時、東京六大学では
小学校の教員免許が取れたのは立教だけです。
自分も小学校の教員免許も専門科目として受
けていましたので、将来の進路を考えた時に、お
ぼろげに小学校の教員を第一に考えていま
した。先程申し上げましたように、社会教育主
事課程の方が授業としては興味があったのです
が、仕事として具体的にどうということをするの
か、また、どうすればなれるのかが当時はほと

んどわかりませんでした。実習を体験すればまた違ったのかもしれませんが、当時は実習が必修ではなく、実習を避けて単位を取ってしまったため、仕事として具体的なイメージをもつに至らず、また、せっかく苦労して取った小学校教員の免許ということで、小学校教員がまずは将来の道として念頭にありました。しかし、残念ながら東京都の採用試験に受からず、2年間の民間経験を経て、社会教育の方に路線を変更して運良く江東区の方に採用があったということです。その2年間のブランクを経て社会教育の世界に入ったきっかけというのも、実は岡本包治先生のお力というか、先生の関係の方から次はどここの自治体で試験があるよ、などの情報をいただいて、受験できたというそんな経緯もあります。

先程の就職の話に絡みますが、現在、正規職員としての社会教育主事の採用は厳しい状況にあります。まだ私が入った頃はそれなりに特別区の方も正規職員として採用していたのですが、今はほとんどありません。自分は運良く江東区に入り、特別区社会教育主事会という23区の社会教育主事で横断的につくっている組織にも自動的に入会したところ、実に半分近くの方が立教の出身者でした。それも岡本先生のお力によるところが大きいのですが、立教出身者はある意味主流派みたいな感じで、非常に心強く思ったことを覚えております。ただ最近は全体としての採用の方もないということもありますし、また立教出身の方も減っているということで、少し寂しい状況ではあります。それでも特別区では現在80数名社会教育主事がいますが、3割、4割ぐらいは立教出身だと思います。

この採用に関して付け加えれば、区によって社会教育主事の人数はまちまちでして、江東区は私を含めて3人しかいません。江東区よりも人口の多い江戸川区では2人です。かと思えば、足立区や葛飾区のように15人ほどいたりとか、区の方針、考え方によってそういった採用枠もそれぞれというのが特別区社会教育主事の状況です。

社会教育というのはいわゆる教育の手段の名称ですので、扱うジャンルとしては非常に幅広いものがあります。自分がこの20年間実際に携わったところでも青少年に関する教育であったり、家庭教育に関する講座を企画・運営したり、一般の区民の方を対象にした地域課題をテーマにした講座を企画・運営したりとか、関わる年代層もジャンルも幅広いものでした。今携わっているのは、放課後子ども教室という、文部科学省が今年度新しく提唱した学校の施設を利用した子どもの放課後の居場所づくりで、学校が主導するのではなくて、生涯学習・社会教育のセクションが主催をしています。運営に関わるソフトの面だけではなくて、小学校の部屋をある意味改修のようなこともするなど、ハード面の仕事もあります。今までやってきたこととは少し色合いが違い、私自身としては非常に新鮮な感じで、ハード・ソフト両面から子どもの居場所づくりに携われているということは、有意義であると思っています。

この資料に記載してあるとおり、私はこの4月に立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科に入学をいたしました。その理由は、20年間仕事の中で住民の方とかかわりをもち、自分なりではありますが、住民の方の主体性を大切に

にしてきた中で、昨今、行政のスリム化もあり、これからはますます住民の力というか、民による公共が重要になり、それが新しい価値観、社会デザインを形成していくということを考えたからです。そこに自分も行政職員として、また、一市民として関わっていければという思いがあって、それが、たまたま 21 世紀社会デザイン研究科の趣旨とも合致するところがあり、縁あってこの 4 月から通い始めています。

仕事との両立、仕事が終わってからこの立教大学へ来ての勉強ということで、肉体的にはかなりきついところがありますが、入ってみると、年代も新卒の 20 代の方から上は 70 代の方まで、非常に幅広い方が院生としておられまして、職種も千差万別、地方議員や NPO・NGO に勤めている方とか、いろいろな分野の方と出会うことができ、非常に自分にとって刺激になっています。まだ半年ぐらいいか経っていませんが、久しぶりにレポートを提出する苦しみを前期の修了時に味わいました。仕事以外に自分にとってこのような違う世界があることが、仕事のストレスの発散にもなり、精神衛生上は非常にいいのかなと思ったりしています。

最後に就職等のことでもう一言付け加えさせていただきますと、正規採用は厳しい中で、現在非常勤職員としての採用は増えています。これは、役所全体に共通する話ですが、その中で社会教育指導員という専門職としての採用もあるので、社会教育主事課程を取っている学生さんで、とりあえず勤めてその後の進展を待つということもできます。また、公務員として一般行政事務で入っても、社会教育的な考え方が日頃の仕事に生かされる、特に住民参画、住民自

治の推進に生かすこともできます。狭い枠かもしれないませんが、社会教育主事を志す人は夢を諦めずに進んでいていただければと思います。

◆司会：どうもありがとうございます。

ここから先ですが、「学生時代の学びとわたしの今」ということですので、どうやって「学生時代の学び」の方にフィードバックしてくるか、ちょっとそれは置いておいて、せっかくの機会ですから「私の今」ということで、

それぞれの専門職の現状ということに関わるとご質問でもよろしいですし、それから、ここには



いろいろな年代の立教におられた方がいらっしゃると思いますけれども、「学生時代の学び」ということに関わるとのご質問でも結構ですので、どなたに対するご質問でも結構ですので、積極的にフロアの方からもう少しこういうところを聞いてみたいということをご質問願えないでしょうか。いかがでしょうか。

■質問者 A：理学部の生命理学科 4 年生の学生です。私は今年の教員採用試験に通り、東京都で 4 月から教員になる予定です。そこで大熊先生に質問があるのですが、先ほど立教の教職課程はあまり実践的な科目はないっておっしゃっていらして、私も実際この 4 年間教職課程を受講して同じように思っていました。大熊先生は埼玉県の教採に合格して教員になるに当たっ

て、残りの半年の学生生活の期間で何かしていたことなどあったら是非お話しをうかがいたいと思います。

◆大熊氏：実践的ではないってということについて言葉が足りなかったなと思いますので補足します。つまり私が勝手に思っていたのは、教職課程というのは採用試験に受かるためのものなのかなというふうに勝手に勘違いしていたので、採用試験の問題とはあまり関係がなかったなという部分で実践的ではないと思ったわけです。

試験に受かった後の残りの学生生活で、何をすればよいかというよりは何をしとけば良かったかなというところで、やはりこれは思うのですけども、やっぱり勉強が足りなかったなという部分です。今も必死になって勉強していますが、専門的な勉強、自分でやっぱり知識を蓄えなきゃいけない。そして、それを生徒達に伝えていかなければいけないですから、本当に知識は蓄えていかなきゃいけないなと思いました。

あとは、とにかく思い出作りじゃないですけど、人間と接する仕事なので、やっぱり、例えば、私は何をやったかという、やはりもうその頃は単位も随分取り終えていて非常にゆとりのある学生生活を送っていました。あまり良いかどうか分からないのですが、私は地元の小学校や中学校に行きました。そして私のことを知ってくれている先生方に、「何か学校でやらせてくれませんか」とお願いしました。私が行った学校には、空き教室がいっぱいあり、障害のある方が作業されていたので、そこに加わらせていただき、サッカーやったり、作業を一緒にやら

せていただいたりとかしていました。

今思えば、私は社会科が専門ですので、今ではすぐに行けないような遠方にある博物館、例えば九州の博物館に行きたいと思っているのですが、そういうところに時間があった学生時代に行っておけばよかったかな、と思っています。今、この残りの恵まれたいい時期に、これは絶対やっておいた方がいいということのを思いっきりやっておくのがいいのかなと思います。

■質問者A：ありがとうございました。

■参加者：私は中学校で教員の受け入れを担当しています。今の質問の方にも是非知っていただきたいのですが、もし興味があるようでしたら、うちの学校でTTをするとか不登校の生徒の面倒を見ていただけませんか？

毎年、ボランティア・センターに行っていてそういう学生の協力を求めている、現在も一人手伝ってもらっています。合格したのでしたら勉強なんかする必要がないので、その朗報を持ってぜひうちの学校にきていろんな子がいますから、現場で勉強するのもいいと思います。ぜひ、お薦めします。ちなみにうちの学校では、他大学の学生も毎日一人、二人来ています。ぜひ来てください。

◆大熊氏：もうひとつ思い出したのは、私は高校に受かったので、体力的に高校生に負けないぞという気持ちで、体を鍛えたりしていました。

あとは母校の高校に行って、時間をつくっていただき高校の先生のお話を聞いたりしていました。そうすると、私が卒業した学校は県内だ

といわれる進学校と呼ばれる学校だったので、そういう学校は特別であって、高校には色々な学校があるよと教えられました。大体、私の母校にいらっしゃる先生というのは前任校がちょっと大変な学校だったという先生が多いので、いろいろお話を聞かせていただきました。そうすると、ああ、この先生ってこうだったのだとか、おもしろいお話が聞けたりしてよかったと思っています。

あと教職課程にはすばらしい先生方もいらっしゃるし、仲良くさせていただくといいのかなと思います。

◆司会：ありがとうございます。今の話題に関連してでもいいし、そうでなくても結構ですけど、ご意見、ご質問はございませんか？

■質問者B：大学におけるリベラルアーツについて、皆さんはどのように体験し、今どのようにお考えでしょうか。

◆司会：いかがでしょうか。それぞれの方にお聴きしたいと思います。寺西さんからどうぞ。

◆寺西氏：リベラルアーツという言葉は自分たちの時代には余り聞かなかった言葉でした。今回、こちらに来る前に立教のホームページを見たのですが、その時までには詳しくは知らず、いろいろ調べたりしました。まさに、例えば中学校でいえば「総合的な学習の時間」、それから品川区では、よりよい市民を育てる教育ということで「市民科」というものもありますが、この科目にリベラルアーツは活かされるのではな

いかと思います。私は国語が専門ですからもちろん国語の授業が一番主なのですが、実際に学校で仕事をしているとクラス担任をしたり、「総合的な学習の時間」や「市民科」のような授業を担当します。ですから国語だけやっていたらいい、日本文学だけわかっていればいいということは、小学校も中学校も、多分高校もそうだと思いますが、教員に求められる必要条件を満たしていないと思います。

立教大学の中で私が活動してきたサークル活動であったり、立教のキャンプであったり、または教職課程や学芸員課程を取っていたとか、学生時代の様々な体験がすべて血となり肉となり、先ほど寺崎先生の「豊かな感性」というお話をいただきましたが、そういうところにつながっていると感じています。

私が教員になってから大学院に行ったときに感じたのは、教養のある専門人というか、教育の専門性が足りなくなっていた部分は上越教育大学大学院で身についたかなということでした。ただ、教師になる前提としての人間性や関係性を大事にする態度などは、立教大学で学んだことがとても大きかった、と感じています。

◆司会：いかがですか。大熊さん。

◆大熊氏：ちょっと話がずれてしまうかもしれませんが、ご存じだと思いますが教員免許が更新制になります。これに関連してひとつ心配というか思うことがあります。ちょうど我々の頃が教員になれない、実際、教職課程を取って教員に絶対俺はなるんだという人が100パーセントだったかといったら、決してそうではない時

代に私は大学にいました。

ですので、教職課程の授業が必ずしも皆さんは教員に実際なるんだから、教員になるんだから教員としてはこうなんだよってというような授業ではなかったと思うんですね。それは、あえてそうしていたのか、実際問題そうなのかはわからないのですが、私はかえてそれがよかったのかなあとと思っています。

これから教員免許が更新制になり、「本当に教員をやっていくんだ」という人しか教職課程を取らなくなったとしたら、もしそれで、「あなたたちは教員になるんだからこういう勉強をするのっ!」というふうな教職課程になったら、私はいやだなと思います。なぜなら、例えば、模擬授業をする授業などの時に、奈須先生とか逸見先生の授業だったのですが、その時、先生方がおっしゃったのが、こういう力は別に教員だけに限らない、社会に生きていく人間としてこういう力は大事なものだ、やはりあると本当にいい力なんだというようなことをお話しされていた気がしました。例えば、プレゼンテーション力ですとか、コミュニケーションをする力ですとか、そういうものは実際、私は教員以外の仕事はアルバイト以外の経験をしたことはないのですが、必要だと思います。

だから、「あなたたちは教員になるんだ」という前提ではなくて、そういう広い力、広い視野に立ったものというのは、結局、そういう総合的な力っていうのが教員にも必要だし、それは教員にのみ必要な資質ではないと思いますので、私は、いわゆる「専門ばか」ではない教養人としてのそういう教育をめざしている立教大学の方針はすばらしいことだなあと考えていま

すし、今後もぜひ、そうしていただけるというのかなと思っています。

◆司会：ここまで教職のお二人で、これから社会教育領域の方にもお応えいただこうと思います。ご質問いただいた方、今までのお二人のご発言をお聞きになっていかがですか？

■質問者B：教職ということに限って見た時に、私は教科専門が数学なのですが、国語なり地歴や公民なりの教材を考えてみますと、下手するとマニュアル的な教材になってしまう。そうではなく、広い自分の経験の中で、広い視野の中から教材を選ぶ。今、子どもたちに必要なものはなんなのかということ判断しながら、マニュアルではない教材をつくるという力、それってやっぱり教養の成せる技ではないかと思っています。

自分のことを考えると、あくまでも数学の世界なんですよ、自分の世界は。外の世界から生徒たちを数学に引っ張り込む部分というのが、自分自身は実際不足していたかなと思うんですね。先ほどの教養という中で自分の教科、領域の範囲の外にあるものをどう教科と結びつけられるか。それが今、例えば表現力の問題ですとか思考力だとか、あるいは活用力だとかいろいろいわれている部分で、教職なんかは大事なかな。そういう面では、先ほどのいわゆる「専門ばか」でないといろんなことを常に、雑学的なこともしろいろ知っている中で本当に必要なものはこうなんだよ、ということができるといえるのかな。そういう面ではこの全学共通カリキュラムですか、私の時代は当

然一般教養、こういうシステムというのは大事なかなという気がしました。

◆司会：ありがとうございます。おそらく、寺崎先生がおっしゃられたノーイング・イン・アクション(knowing in action)というそのノーイング(knowing)のレベルは、まさにいまおっしゃられたマニュアルで実務的にできるようなことではなくてということ、大熊さんはこれからまだまだ教師として成長されていく過程ですから、そこところが今の段階ではこんなこととして振り返られるのかなということ、を語っていただいたんだと思います。学生時代は本当に試験に直結するような実務的なことをびびり習うんだらうなど。採用試験に受かってから小学校にお願いして入り込んでいったという、そういう行動力ですね。そういったあたりは立教のカリキュラムも、手前味噌ですけども、多少なりとも「特別活動の研究」などでちょっとやってみようかとか、割と思いついてやっていると私たちにもあります。それ以上に、大熊さんがこの池袋、そして立教を愛してくれて充実した学生時代を送られたということが行動力になったんでしょう。おそらくそういうことで、なかなかフレクシオンというのはそう簡単に言語化ができないような面があるんじゃないかなという気がするわけです。

社会教育領域の方はまたちょっと違ったりリベラルアーツのとらえ方があると思いますので、御三人にもうかがってみたいと思います。阿諏訪さんから順にお願いします。

◆阿諏訪氏：ご質問なされた先生がおっしゃっ

たようないわゆる「専門ばか」というのは、私の周りにいっぱいいて、多分私もそれに近いのかなと思います。というのは、1995年に立教を卒業しまして8年間、就職するまでにかかっています。その間、自分と違う他分野の人と接触する機会というのが驚くほど少なかったのだな、ということに就職してあらため気づいています。

私は人間関係を構築するのがそれほど上手なほうではなく、職場に入ってからいろいろと苦労をしたところもあるかな、と自分では思っています。このようななかで、さきほど申し上げた、立教の学芸員課程で培った友だちというのは類まれなる存在といえますか、私にとっては異業種、他分野の人たちとして今もずっとお付き合いいただいています。

あと、他の仕事との競合という意味でいいますと、博物館は「博学連携」ということを最近、言うようになっていきます。博物館と学校教育と連携していこう、ということが盛んに言われています。たとえば小学生が遠足で毎年、1万人以上来るのですが、地域的には横浜市の大半と大和市、海老名、それから茅ヶ崎からも来ますし川崎からも来ます。そういう子どもたちを受け入れています。

それから、最近は「出前授業」とか「出張授業」というような名前で言っているのですが、学芸員が何かのテーマを持って小学校に授業に行くということも行われていますし、あと、調べ学習とかいうのが小学校であるようでして、そこでは地域の何かテーマを見つけて、そのことについて子どもたちが調べるというのを補助するというのもやっています。それに関して

はちょっと不思議で、学校も大変お忙しいとは思いますが、子どもたちがインターネットで調べて、博物館の名前が出ると、いきなり電話をしてくるのです。電話をしてきて、なんとかについて教えてくださいと言って、目で見ないと教えられないものって幾つかありますので、「それはどういう本に書いてあります」と言うと、「じゃあ、その本を送ってください」とか、「写真を送ってください」とか言われて、「いや、ちょっと送ることは難しいです。特に写真資料などは博物館ではすぐ送れませんので、図書館に行ってみてください」と言うと、「図書館にそういうのがあるんですか」ということになって、ちょっと順番が変だなと思うんですが、そのようなこともやっておりますので、これからも色々勉強していきたいと思っています。

◆鈴木氏：図書館について言いますと、今、学芸員の阿諏訪さんがおっしゃっていたように、そういう話が次に回ってくるのが図書館でして、それこそ小学生が郷土の歴史を知りたいというレベルから、あそこの株価が今度どうなるか、社長の住所を教えろとかですね、教えていいのかなとか思いながら、わかる範囲では一生懸命調べて教えたりもいたします。

本当に雑学の宝庫といえれば宝庫で、これを教養というのかどうかはちょっとよくわからないのですが、もともと図書館司書の資格課程自体が、欧米ですと修士課程だというふうにいわれています。学部で取るものではないのです。学部ではそれぞれある程度学部の専門というものを持った上で、さらに図書館学の専門を持つ。つまり、海外の司書の方と話をしたときには、

「あなたの専門はなんですか」と言われる。そういう時に日本ですと、本当に図書館学の専門で司書を取った方なんかは、答えに困るという話があります。

それに比べると、私なんかは一応英米文学科出身、こんな作家を専攻しましたみたいな話ができるという点においては、やはり立教のシステムの恩恵を私も受けていて、自分なりのリベラルアーツというか、自分なりのバックグラウンドを持った上で仕事ができているのかというふうに思います。

先ほども申しましたが、図書館の仕事というのは、図書館員としての専門的な知識とはなんだろうか考えた時に、パソコンの使い方ですとか目録の書き方ではなくなってきています。でも図書館の専門的な仕事というのを最近ちょっと考えた時に、内田樹さんという哲学者が、「教養とは何か？」という問いを定義したときに、「教養とは、読んでいない本について知っていることである」と。要するに、本を読んでいるという知識は専門的な知識であるけれども、「ああ、この話なら聞いたことがあるぞ」という幅広い世界に対する一種の見取り図を、自分の中に持っているかどうかということこそ教養である、と聞いた時に、これが図書館員の専門知識だなと自分で思ったところがあります。

自分で読んだことがない本の方が図書館の場合大半、ほとんどの本を私は読んだことがありませんが、しかし、どこにどんなことが書いてあるかは図書館員として私なりには知っているつもりでおります。それが教養というのであれば、自分が教養人であるというつもりは全然な

いんですが、専門的な知識としてそういう教養を持っている、そういう分野なのかなというふうに思っています。

◆田中氏：大学時代を少し思い出してみますと、当然全カリはなかった時代ですが、文学部共通科目というのがあったように思います。学科の枠を超えて、いろいろなジャンルの科目を学ぶ、多分2科目程度取ることになっていたと思います。私はプレヒトの演劇に関する科目を取ったのを思い出しました。あとは、在籍した教育学科ですが、教育学科は初等教育課程と教育学課程の二つに分かれていました。ちなみに当時の小学校教員免許は1級、2級でしたが、初等の方は1級で、教育学の方は2級がとれました。私は、必ずしも小学校教員を目指すのではなく、広く教育学に関しての科目を取れるという方の教育学課程に進みました。そういったこともあり、その中では授業研究のような純然たる学校教育に関することだけではなくて、教育のフレームの中ではありますが、教育社会学や社会調査であったりとか、教育史、大正デモクラシー時代の自由教育など結構幅広いことを勉強できたのかなと思います。学校・社会教育講座では当然、社会教育に関することを学べたというところで、当時でも立教大学には、今でいうリベラルアーツというのでしょうか、視野を拡大できるような科目が用意されていたというふうに思っております。

それが今の自分の仕事にどう生かされているかというところは、目に見えた形でこうだとはなかなか言えませんが、社会教育・生涯学習というのは先ほど申し上げましたように非常に

ジャンルが広いので、実際、いろいろな講座を企画する時にリベラルアーツの力が要求されたり、学習方法の面でも単に講師を呼んで承って聞くということだけではなくて、ワークショップ形式など多様な方法を実践して豊かな学習展開を試みたりなど、そういったところで少し生かされているのかなということは感じております。

あと、講座等をとおして住民の方と人間関係を構築していく上で、傾聴や正しい伝達などのコミュニケーションスキルが必須であり、自分が出来ているかどうかは別にして、社会人として生かされることであると思っております。

◆司会：どうもありがとうございます。

まだまだご質問なされたい方もたくさんいらっしゃると思います。もう少しかがってみたいこともたくさんあると思います。しかし時間がなくなってきました。

最後にリベラルアーツということでご質問いただき、それはなんであるか、何が現在の職に活かしているかということについてそれぞれのお立場でご発言いただきました。なかなかそれを言語化するのが難しいのかもしれませんが、5人の方々のお話をうかがっていて、大変私が印象に残ったのは、「立教は私を受け入れてくれた」「器が大きい」というような言い方をされたことです。度量が大きいとか、懐が広いということでしょうか。これを大変ポジティブな財産として私たちはとらえていきたいと思っております。

最低限の節度はきちんと持って、礼節は守りながら、しかも越境していくとか、そうい

うカリキュラムのあり方とか、教育のあり方ですね。そういったことが5人の方々それぞれ、なかなかあとから振り返ってみないと、自覚化できないのかもしれませんが、それぞれの方、大変制度が目まぐるしく変わっていく、資格をめぐる状況が大変厳しいものになっていく中で、非常にタフに実践されているということが今日のお話をうかがっていてわかりました。

そのことの大本になっているのは、やはり、そういう度量の大きさみたいなものが立教大学全体の中で、特定のカリキュラムということではなくて、正課のカリキュラムも正課外のことも含めて、いろんな財産として持っているということを私たちはもう一回思い起こして、肝に銘じて、これからの改革に取り組んでいきたいなと思うわけです。

正直申しまして、今の現状でいろいろお話しになりたいこと、皆さんたくさんお持ちだと思います。しかし、今日のシンポジウムとしては、不手際な司会で大変申し訳なかったのですが、時間の関係もありますので、ここで終えさせていただいて、もし、お時間に余裕のある方は、この後、直接いろいろご質問いただいたりすることもできるかと思えます。

5人のシンポジストの皆さん、フロアの皆さん、ありがとうございました。

閉会挨拶

司書課程主任 宮部頼子

司書課程主任の宮部でございます。今日は、学校・社会教育講座40周年を記念いたしましたこのシンポジウムに長時間最後までご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

私どもの学校・社会教育講座の教員も今日は非常に貴重なことを多く学ばせていただいたと思っております。40周年ということですが、人間の寿命に例えていきますと、今、寿命は延びておりますので半分ぐらいの折り返し地点かなという感じがしております。寺崎先生もおっしゃっておられました私どもが今、置かれている状況は非常に厳しいものでございまして、日々、それを実感しております。しかしとりあえずはこれからの40年を目指して教職員一丸となってなんとか発展を続けていきたい、一丸となって頑張っていきたいと思っております。

どうぞ、今後とも、皆さまの一層のご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

今日は寺崎先生はじめ、シンポジストの皆さま、そしてご参加くださいましたお一人おひとりに心からお礼申し上げます。どうもありがとうございました。